



目次	
●巻頭言	1
●県大会参加報告	2
●関プロ神奈川大会報告	3
●特集	4
●郡市教頭会ネットワーク	5
●教育懇談会報告	6
●随想	7



## 「職員室と教室は相似形」

新潟県小中学校教頭会

副会長 **寺井昌人**

(長岡市立阪之上小学校)

年の瀬、県内外30名くらいの管理職の方々と交流会に参加する機会をいただきました。その会は、インフォーマルで、管理職として大切なことは何かと議論したり、それぞれが持ち寄った実践に対して、歯に衣着せぬ意見を交流したりするものでした。その中で、「教師と子ども、職員室と教室は相似形を成す」という「キーワード」が心に刺さりました。多くの方が、何かにつけて「相似形だから…」と、このキーワードを使ってお話をしていたので、インパクトのあった言葉であったと考えます。個人的には、これからの学校を活性化する、或いは改革するような心構えのように思えました。

そこで、「教師と子ども、職員室と教室は相似形を成す」ことについて紹介して下さった牧田秀昭先生(福井大学義務教育学校校長)の著書で少し詳しく調べてみました。その一部を抜粋します。

「・・・私のこれまでの経験から、そしてこれまでの共同研究して下さった研究者の知見から、教師文化と生徒文化は同型構造を持っていることはほぼ疑う余地はない。…(中略)…職員会議や研究会が、個人の意見を述べる機会が保証され、皆が聴き合い、新たな知見を生み出していくような場になっていたとしたら、その経験を自分の授業や指導に持ち込みたくなるはずだ。」(牧田/秋田(2021)『物語る校長』,左右社)

「主体的・対話的で深い学び」が多くの公立校で目指す授業として設定されていると思われます。これを教室の中だけで終わらせることなく、職員室(職員間)にも持ち込んでみるということでしょうか。例えば、教師の学びの場である授業協議会が、「主体的・対

話的で深い学び」になっているのでしょうか。また、職場の「心理的安全」などという言葉も聞きます。集団の構成員が安心したり、居場所ができたりすることで、生産性が高まるものです。とてもよいことです。教室の子どもたちの「心理的安全」が確保されているのでしょうか。これを教室に持ち込んだらどうなるか試して見る価値はあると思います。最近では、GIGAスクール構想に伴う一人一台端末の活用等もあります。子どもたちの技術の習得には目を見張るものがありますが、教師として子ども以上(難しいかもしれませんが)に利用できているのでしょうか。

職員室と教室とを往還することで、目指すものが実感を伴いながら理解できるのではないかと思います。つまり、子どもの成長と教師の成長は相似、教師が新しいものを学ぶ、或いは変わっていかねばいけないのだと思います。

年が明け、まずは小さな一歩を踏み出そうと、当校の教育目標「つよく かしこく あたたく」にしたがって一つ取組をしてみました。この教育目標の「つよく」とは、目的をもって挑戦するとか体を鍛えるという意味をもちます。子どもが挑戦するならば教師も挑戦ということで「校内縄跳び大会」に出場してみました。練習をし、記録に挑戦する子どもの気持ちになって跳んでみました。「ああ、つらい。でも満足感もある。」久しぶりに目標に向かって挑戦する気持ちを感じました。そして、子どもと同じ方向を向けた気がしました。まずは、管理職から範を示したり、立ち位置を考えながら行動したりすることが、これからの学校を活性化する、或いは改革するような気がします。

## 県大会参加報告



### 県教頭会研究大会 長岡・三島大会に参加して

妙高市立妙高原南小学校

三田村 尚子

県教頭会研究大会長岡・三島大会は、全県をオンラインで結び、半日日程で開催されました。初の試みの実現にあたり、まさに大会キーワード【自立・協働・創造】を体現しながら大会運営をしてくださった実行委員会の皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

私は「組織・運営に関する課題」の第4A分科会に参加しました。最初に、上越市立中郷小学校の二上昌基教頭先生から、隣設する小中学校で地域と連携・推進している小中一貫教育について発表がありました。「子どもの自己有用感を高めたい」というビジョンの共有、地域コーディネーターと実行した7年間の中学校区総合的な学習の時間カリキュラムの見直しと地域連携の拡大、小中連携（企画）委員会の計画的な運営について、具体的な児童の姿を交えながらお話をいただきました。特にビジョンの共有の過程で、関わる大人たちが役職を超えてミニクラス会議を開き、「自己有用感」を捉え直し、その大切さを実感するというエピソードが興味深かったです。

発表後は小グループに分かれ、小中一貫教育やCSの組織・取組について、中学校区の現状や地域の実態に合わせて教頭等としてどのように対応しているのか等について話し合いました。

最後に、指導者の稲毛真哉指導主事様から、児童生徒の学び方の実態の共有や地域から学び・ふるさとに貢献する活動の大切さ、行政やその地域ならではの組織とのパイプ役となる教頭の職務内容に焦点化した視点をもつことの有効性についてご示唆いただきました。

勤務校は令和5年3月に閉校・統合を迎え、妙高原地区は1中1小1子ども園となります。この機会をチャンスと捉え、感謝と改善の視点と様々な人との対話を大切にしながら、本大会で学んだことを生かして尽力していきます。



### 県教頭会研究大会 「長岡・三島大会」に参加して

十日町市立中里中学校

足田 克彦

今年度の県教頭会研究大会は昨年度と同様にオンラインでの開催でした。新任教頭の私にとっては、学びの多い貴重な時間となりました。

最初に行われた分科会では、研究課題「教育整備に関する課題」の第3分科会に参加しました。糸魚川市立糸魚川東小学校の相馬修教頭先生から「学校と地域の協働活動～社会性の育成を通して～」と題して提言発表をいただきました。発表の中では、糸魚川中学校区で取り組んでいる「家庭や地域と連携したあいさつ運動」「自己肯定感を高める地域との協働活動」について、各校の特色ある活動が具体的に紹介されました。家庭、地域とつながりながら、9年間の一貫した指導で児童・生徒の社会性を育んでいく取組に、小中連携の大切さを改めて実感しました。

次の小グループによる協議では、地域と連携した各校の取組について意見交換をしました。各校の現状や、成果と課題等を話す中で、今後の取組のヒントになったり、お互いの抱えている悩みを共有できたりしました。今回、グループの皆さんからいただいた意見を、自校の取組に生かしていきたいと思えます。

そして、最後に出雲崎町教育委員会管理指導主事の近藤道範様から、地域との関わりの中での教頭の役割について御指導をいただきました。近藤様から「授業の向上を図るために、教育環境を整備する。そのための『ヒト・カネ・モノ』を準備していく。」「学習を通じて具体的な子どもの姿が見える活動で地域に還元していく。」「なぜ地域との協働が有効なのかを考えて活動を精選する。」等、地域との関わり方について御教示をいただきました。これから活動を進めていく上で、方向性を明確にすることができました。

今回の大会の開催にあたっては、御多用の中、要項の作成やオンライン開催の準備等、中心となって運営してくださった実行委員の皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

# 関ブロ神奈川大会報告



## 10年後の新時代を 生き抜く力

長岡市三島郡小中学校教頭会

吉田 豊  
(長岡市立大島小学校)

私は、神奈川大会の研究副題「10年後の新時代を生き抜く力の育成」のために、どんな取組や方策を伺うことができるか楽しみにしていた。

記念講演では柔道家である鈴木桂治氏の次の言葉が心に残った。①学ぶことをやめたら教えることをやめなければならない。②失敗は経験値を上げる。ポジティブに次に生かす「たくましさ」を育てる。

元全日本監督の齋藤仁氏との豪快な逸話を交えた講演で、あっという間に時間が過ぎた。このような話術も習得したいと思った。

翌日参加した分科会の研究課題は「組織・運営に関する課題」である。

1本目の発表は「学校運営の活性化と地域との連携」。複雑・困難化する学校課題を解決するため、コミュニティスクール(以下CS)を適切に機能させたいという趣旨だ。以下は同席した先生方と話し合った内容である。①持続可能なCS活動を目指すなら、働き方改革に逆行してはならない。②CSを動かす地域の方と、学校との橋渡し役として「地域コーディネーター」が不可欠。③新たな取組を次々にやるのではなく、学校と地域で課題を厳選し、一緒に取り組むことが重要。

2本目の発表は「学校リーダーの育成」。学校運営のためには、学校課題を自分事として受け止め、適切に判断し、核になってチームを動かすミドルリーダーが必要である。この育成のために議論した内容は以下のとおりである。①大々的な研修よりも日々の活動を人材育成につなげる。②失敗は大切な財産だから許容することも必要。仕事を任せただけには失敗も受け入れる。③仕事ができるだけでなく人柄や人望、かかわる力も必要である。

私はこの大会を通して、あらためて教頭の職務の重さとやりがいを感じた。働き方改革を推進すること、教師を目指す若者を増やすこと、たくましい教員を育てることが私の使命である。



## 「会って」「合わせて」 神奈川大会

新潟市中学校教頭会

広野 尚子  
(新潟市立小須戸中学校)

11月10、11日に収容人数2400人を超える神奈川県民ホール、国際会議等で名高いパシフィック横浜ノース会場で行われた神奈川大会に参加しました。

初日の記念講演では、「時代を生き抜く真のたくましさ～誰もが輝くチームづくり、そのアプローチ～」と題して、木村 昌彦様、鈴木 桂治様が、選手、或いはコーチとして柔道に関わる中で、自身の取り組む姿勢や指導者としての在り方を教授くださいました。「データは数字にすぎない、映像は見るだけなら娯楽、研究成果はただのペーパー、情報は生ものであり、誰がその情報を示すかで価値が変わる、情報の提供の場によって、情報の輝きが変わる」からこそ「どうデータを使うか分析が大切」と、熱を込めてお話しくださいました。

二日目の分科会では、「教職員の専門性に関する課題」に参加しました。春日部市立大沼中学校からは、春日部市独自の学校教育プラン「春日部メソッド」の浸透を図るために、「伝え合う」「学び合う」「育ち合う」「思い合う」の視点で、教職員の施策提案、資質向上研修があることを伺いました。「主体的・対話的で深い学びを充実させる授業づくりのポイント」シートはチェックリストとして、活用できる内容のもので、とても参考になりました。また、川崎市立中学校教頭会より、「生徒指導の専門家としての力を高めるために」をテーマに、教員アンケートを行い、環境づくり、組織づくり、関係機関との連携などの課題を表出しながら、チームで行う生徒指導についてを学びました。分科会では、9名グループで協議しながら、ICT活用についてや、SSWの活用など多岐にわたる話し合いを行いました。限られた時間で、情報共有と共感で、あっという間に時間が経ちました。それでも、「会って」それぞれの人のもつ空気感を味わいながら、先生方の現状に共感し、想いを馳せ、気持ちを「合わせて」、明日からのエネルギーを蓄える素敵な時間となりました。

特集

## GIGAスクール構想に向けた取組の現状



### 学校間の連携に着目した ICT活用の取組

見附市小中学校教頭会

岸 亮

(見附市立田井小学校)

GIGAスクール構想が進む中、昨年度見附市小・中・特別支援学校すべてに学習者用タブレット端末が本格導入された。これにより、各校でICTを活用した授業の推進・タブレット端末の基本的な使用(使用上のルール設定、個人情報の保護、パスワード管理等)の策定を実施することとなった。

そこで本校では、中学校区にある小・中・特別支援学校間の連携に着目した取組を推進することとし、以下の取組を行った。

#### (1) 中学校区GIGAスクール構想担当者会議

中学校区の情報教育担当者5名(中学校1名、小学校3名、特別支援学校1名)が集まり、会議を行った。会議の内容で重点的に話し合われたことは使用規則の策定であった。各校担当者が共通して取り入れる規則の視点を出し合い、練り合った。その後集約された意見を担当者が各校に持ち帰り、使用規則を策定した。中学校区で足並みを揃えることで、各校担当者が無理なく安心してICT環境の整備を進めることができた。

#### (2) みつば三校リモート授業

見附市では本校を含め、少人数の特性を生かした教育を推進する小学校三校(みつば三校)がオープンスクールとして指定されている。コロナ禍でもみつば三校の交流を深めるため、学習者用タブレット端末を活用したリモート授業の実施を始めた。担任間の事前打ち合わせや授業当日の運営等においても、ICTを推進することで各校担任は創意工夫した授業を展開していった。

このように、学校独自の取組とはせず、学校間の取組とすることで、洗練されたICT環境の整備やICT機器活用の幅が広がる授業が推進されていくと考える。



### 市共通指針の下で進める 情報活用能力の育成

胎内市中学校教頭会

樋口 太郎

(胎内市立中条中学校)

胎内市では、市教育委員会から示された「胎内市立小中学校1人1台端末活用指針」(以下「指針」)に基づき、小中連携して体系的に情報モラルを含めた情報活用能力の育成に取り組んでいます。

指針では、「タブレット操作に関する指導」について以下のように定めています。

- 小学校低学年  
静止画、動画が操れる ドリルソフトが使える  
グーグルクラスルーム及びグーグルミートが使える
- 小学校中学年  
タイピングができる インターネットが使える
- 小学校高学年  
ドキュメント、スライド、ジャムボードが使える
- 中学校  
スプレッドシートが使える
- ※それぞれの学年で指導を開始し、その後も継続して指導を行う。示した学年より前に指導を開始してもよい。

詳細な指導計画は、各校で作成し、市内で共有できるようにしています。

また、情報モラルに関する指導については、①4月に学校・家庭でのタブレット端末使用のきまりについて指導すること(1時間)、②小学校3年生から中学校3年生までは「情報化社会の新たな問題を考えるための教材(文科省)」を活用し、年間2時間情報モラル教育を行うことなどが定められています。

これらを基に、ICTとこれまでの実践の最適な組み合わせを模索しながら各校の授業研究や教育課程の改善が進められています。

成果としては、以下の点が挙げられます。

- ①ICTの活用が目的化することなく、「胎内市授業スタンダード」を軸にしなが、手段としてのICT活用方法の開発が進められている。
  - ②情報の収集や活用の場面でICTを有効に活用する児童生徒が増加し、学習のまとめや情報の発信、共有の質が高まっている。
- 課題としては、以下の点が挙げられます。
- ①教職員のICT活用指導力の差が授業等のICT活用頻度の差につながり、結果として生徒の情報活用能力育成に差が生じている可能性があること。
  - ②教職員の負担を軽減しICT活用指導力の向上や教材開発の余裕を生み出すために、各種調査や事務のデジタル化、諸会議のオンライン化を一層進めること。

「すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」を実現するため、これからも指針の下、市内各校が緊密に連携し、着実に実践を積み重ねていきたいと思ひます。



# 郡市教頭会ネットワーク



## 加茂市南蒲原郡 小中学校教頭会の紹介

加茂市南蒲原郡小中学校教頭会

笠原 崇

(加茂市立加茂小学校)

加茂市南蒲原郡小中学校教頭会は、加茂市の小学校6校・中学校5校、田上町の小学校2校・中学校1校、全員で14人の教頭会組織です。当教頭会は規模が小さいため、互いの顔がよく見え、一人一人の得意分野や、勤務校で取り組んでいることなども分かり合えています。困ったことがあっても気兼ねなく相談し合えることが自慢です。また、教頭としての資質・能力の向上を図るため、年に数回教頭会を開き、研修を重ねています。教頭会の中で情報交換の時間を設け、近況報告だけでなく悩み事なども相談し合うことで、業務改善のヒントや明日からの活力を得ることができています。

### 1 令和2年度～令和4年度の取組

令和2年度から令和4年度までの3年間は、県教頭会研究大会の発表（教育課程に関する課題。R3年度：羽生田小学校、R4年度：七谷小学校）の準備・支援に取り組みました。羽生田小学校、七谷小学校どちらも発表テーマが地域連携に関するものでした。各校の地域連携の取組の成果や課題について意見交換を行いながら、発表内容がよりよくなるように検討を重ねました。中越教育事務所の指導主事を講師としてお招きし、発表内容についてご指導いただく機会も設けました。発表者だけでなく会員全員が地域連携における教頭の役割について知見を深め、勤務校での取組に生かすことができました。

### 2 令和5年度からの取組

「教頭会の情報交換で、よい刺激をもらっています。」「他の教頭先生の取組を知ること、勤務校の取組に生かすことができています。」という声から会員から聞かれます。令和5年度からは、一人一人が勤務校での取組をまとめたレポートを発表し合うことを中心に研修を進めていきます。レポート発表と意見交換を通してお互いに刺激し合い、教頭としての資質・能力の向上がより一層図られるよう、全会員で進めていきます。



## 共に学び、 共に高める教頭会

村上市岩船郡小中学校教頭会

貝沼史弘

(村上市立神納小学校)

村上市岩船郡小中学校教頭会は、小学校15校、中学校9校、24名の教頭で組織されています。普段から小学校と中学校の教頭が一緒になり、研修や情報交換に努めています。そのため、小学校、中学校の垣根を越えた情報交換や情報共有を行うことができ、業務推進に役立っています。

### 1 年間を通じた研修活動

村上市岩船郡小中学校教頭会では、年6回の定例会を開いています。定例会では、郡市校長会長や村上市の教育長などを講師として招き、ご講話をいただいています。講話をとおして、市や村の教育基本方針を達成するために、教頭としての力量を高めていかなければならないということを改めて考える場となっています。

また、本年度は、「安全点検の有効な実施方法」を研修テーマに取り組んでいます。その中で、各校の安全点検方法について共通理解を図ったり、学校教育課の施設担当者を講師に招き、「学校施設長寿命化」のために必要な視点を学んだりしています。

### 2 事務職員との合同研修会

毎年夏期休業中に事務職員との合同研修会を行っています。本年度は「学校と地域の協働の在り方」をテーマに行いました。研修会では講師を招き、講師のお話を基にした演習を行っています。円滑な学校運営を行うために、事務職員とともに予算の視点を軸にしながら、学校の教育課程や地域の特色を生かすためにどんなことを行っていくかを考えています。

コロナ禍で制約も多く、喫緊の課題が山積している昨今ではありますが、会員相互の連携強化を目指して、一つ一つの課題に対し教頭会一丸となって活動を進めていきたいと思っています。

# 教育懇談会報告



## 令和4年度 教育懇談会の報告

新潟県小中学校教頭会

調査要請部長 **鷺尾 健仁**  
(新潟市立青山小学校)

日時: 令和5年1月17日(火)15:00~16:45

会場: 万代シルバーホテル

主催: 新潟県小学校長会・新潟県中学校長会

### 1 教育委員会ごあいさつ(一部紹介)

新潟県教育庁義務教育課 課長 今井 渉 様  
(新潟県教育委員会)

教育長 佐野 哲郎様のメッセージ代読)

- 教員採用について、子どもたちの目の前にいる教師が魅力ある存在であってほしい。その体制づくりに向け、学校を支援していく。

新潟市教育委員会学校人事課 課長 金山 光宏 様  
(新潟市教育委員会)

教育長 井崎 規之様のメッセージ代読)

- 育成指針の見直しと新たな学びの場の体制づくりを行っている。教員一人一人の強みと学びを生かした研修体制を構築するとともに、働き方改革をより一層推進してほしい。

### 2 研究協議

協議題「社会に開かれた教育課程の実現に向けた学校づくり」

話題提供①

新潟市立御免町小学校 校長 相澤 祐助

- 「しばたの心継承プロジェクト」を核に、ふるさとへの誇りや自信を育む
  - ・ 新潟市内全小中学校で令和2年度から実施、継続
- 取組にあたっての視点
  - ・ まち全てが教材であり、それらを生かして人とかがわりあいながら体験的に学ぶ学習を進める。
  - ・ 事業の見える化を進め、児童、生徒、地域住民に対する意識化を図る。
  - ・ 事業の取組の意味付けを行い、しばたの心を継承する学習であることを自覚できるようにする。
- 御免町小学校の実践例 「支援」と「貢献」

- ・ 新発田川を守る(4年)
- ・ 新発田まつりは地域の誇り(3年)
- ・ 防災教育(5年)
- ・ 地域の人とともに(6年・1年)
- 新発田を愛する人材・人財の育成
  - ・ 3つの愛を育む(ふるさと・自分自身・未来)

話題提供②

小千谷市立小千谷中学校 校長 若林 靖人

- 現状把握から捉えた2つの学校課題
    - ・ 学力(思考力・判断力・表現力)と学習習慣を身に付けること
    - ・ 不登校、不適応生徒への対応を図ること
  - 課題を踏まえ自校の教育課程と取組を点検
    - ・ 資質・能力の明確化
    - ・ 地域と連携した教育課程の実施
    - ・ 目標を社会(地域や保護者)と共有化
  - 資質・能力の明確化のために
    - ・ 生徒や保護者を対象としたアンケート
    - ・ 道徳の指導内容や学習指導要領の例から項目を提示
  - 3つの「資質・能力」と教育課程の整理
    - ・ 「明日に向かって挑戦する力」「自分の力で問題を解決する力」「思いや考えを伝える力」
  - 総合的な学習の時間を3つの視点で見直し
    - ・ 「資質・能力」を育むか
    - ・ 地域連携、協働、生徒の参画等があるか
    - ・ 探究的なカリキュラムといえるか
  - 防災学習を窓口にしたまちづくり・絆づくり
  - 地域や保護者との熟議
- ### 3 協議・指導等
- キーワードはストーリー性
    - ・ 子どもたちに問いや強い願いがあるか
    - ・ 自分事として捉えているか
  - 子どもたちに実感させたい、自覚させたい思い
    - ・ 自分の力で人生や社会をよりよくできるということ
  - 教職員はもちろん、保護者や地域と3つの共有を図る
    - ・ 「課題」「目標(姿)」「活動」
  - 子どもとCS委員とで語り合う場を設定する

# 随 想



## 過去と未来への思い

小千谷市立吉谷小学校

山 田 豊

「平成」が終わり「令和」が始まってから5年。ふと平成の時代が懐かしく感じる時があります。私が教員としてスタートしたのは平成元年。私は平成の時代の流れとともに教員として歩んできました。ふり返ればこの31年の間に教育界は様々な変化がありました。

まず平成元年度には学習指導要領の改訂がありました。その改訂を受け、平成4年度から低学年の社会科と理科にかわって生活科が始まりました。その10年後「生きる力の育成」という錦の御旗の下、「ゆとり教育」を柱にした学習指導要領の改訂がありました。この改訂では、今までの教育内容が3割削減されるというまさに教育の大変革でした。平成14年には学校週5日制が始まり、「総合的な学習」も導入されました。平成21年には教員免許更新制度が施行されました。平成25年には、いじめ等の社会問題から「いじめ防止対策推進法」が成立しています。

このように様々な変化の中で教育に携わり、子どもたちとかがかわってきました。当時の子どもたちもほとんどが社会に出ています。今思い返すと、当時の子どもたちのために、どれだけのことができたのかという自責の念に駆られるばかりです。

令和もこの5年の間に、新学習指導要領が施行されました。しかし、この5年の間に何よりも衝撃的だったことは、新型コロナウイルスの流行です。この流行により「今までどおり」が通用しないことを実感しました。これからの学校現場は、前例にとらわれず、時代に合致した教育活動を考えることが必要だということを思い知らされました。

新しい時代の主役になる子どもたちが、激動の社会の中で、困難を乗り越え、たくましく成長していくための「生きる力」を今以上につけることが大切だと感じる今日この頃です。



## チームで働き方改革

阿賀野市立笹岡小学校

小 林 朋 恵

放課後の職員室、「すみません。お先に失礼します。」と帰る職員の声聞いたことはありませんか。「すみません」という言葉をなぜ使うのでしょうか。

先日、何気なくテレビを見ていると、ある和紙の老舗会社が残業を削減し、なおかつ社員が楽しく働きがいのある職場に生まれ変わったという内容の番組が放映されていました。社員の机上也引き出しの中もきれいに整頓され、物が少ないことに驚きました。仕事に使う物はすべて場所が決まっているため、物を探す手間も余分に購入する必要もないそうです。また、社長は、伝統を重んじながらも、今の時代に合った感覚を大切にし、「短い時間で、チームとして実績を挙げていく」能力が必要だとも言っています。

働き方改革について考えることが多かった私は、この会社の改革にとっても感銘を受けました。管理職が指示するのではなく、『課題はどこか』『どうしたいか』をチームで考え、話し合い、改善していく。学校や地域の子供たちのため、そして自分自身の幸せのために楽しく働いてほしい、教師が笑顔でいると、子供たちも笑顔になるはず。教頭になり、日々そのような気持ちでいっぱいになります。

退職する時、「すみません」という言葉をなぜ使うのでしょうか。忙しそうに遅くまで残っている職員に申し訳ないからでしょうか。このような感覚・職場の雰囲気チームで改善していくことも大切だと思います。やるべき仕事を優先し、早く仕事を終わって帰宅できる人を賞賛できる職場の雰囲気をつくっていききたいものです。